

正宗白鳥全集

第十卷

正宗白鳥全集

第十卷

隨筆一

新潮社版

正宗白鳥全集 第十卷

昭和四十二年二月二十八日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 所 大日本印刷株式會社

製 本 所 新宿加藤製本

發 行 所 株式會社 新 潮 社

182 東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部(三)三六五二一
編集部(三)三六五四二一
振替 東京四一八〇八番



亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集
第十卷

監
修

河上徹太郎

小林秀雄

中村光夫

山本健吉

編
集

中島河太郎

第十卷
目次

觀劇餘錄……………	二
歌舞伎座評判記……………	三
眞砂座評……………	五
劇評について……………	一六
歌舞伎座評……………	一七
年の暮……………	一八
東京座「乳兄弟」……………	一九
新演劇及舊演劇……………	二二
儘になるなら……………	二三
酒……………	二三
娛 樂……………	二四
手 紙(A)……………	二六
小説劇と素人芝居……………	二七
劇界の趨勢……………	二九
平凡なる劇壇……………	三三
騙されて中禪寺へ上るの記……………	三四
平泉の三時間……………	三五
飯坂と東山……………	三六
京都の朝……………	四三

好きと嫌ひ……………	四八
奈良の古佛……………	四七
寝ころんで……………	四九
演劇雜感……………	五〇
行く處が無い……………	五一
二十四日……………	五二
岡山より……………	五三
吉野山……………	五五
追 懷……………	五九
談 片……………	六一
感想漫錄……………	六三
手帳より……………	六四
思ひ浮ぶまゝ……………	六七
觀劇雜感……………	六八
京都より……………	七〇
自分の日記……………	七三
「百物語」……………	七五
夏の旅……………	七五
赤倉温泉より……………	七六

和倉より……………	六
和倉にて……………	七
散歩して……………	八
浴泉雜記……………	二
落語研究會……………	六
木曾より……………	七
宿屋の二階より……………	九
我善坊にて(A)……………	六
我善坊にて(B)……………	三
俳　　諧……………	七
我善坊にて(C)……………	七
我善坊にて(D)……………	一〇
泉のほとり……………	一三
田園雜記……………	一五
輕井澤より……………	一八
淺間登山記……………	一九
輕井澤にて(A)……………	二四
退屈さまして……………	二六
ある日の感想……………	二八

大磯にて(A)……………	二三
大磯にて(B)……………	二四
演劇雜話……………	二六
退　　屈……………	二八
影……………	三三
クリスマスとお正月……………	三五
大磯にて(C)……………	四〇
初夏の頃……………	四三
隨感隨記……………	四四
暑い一日……………	四九
蠟燭の光にて……………	一五
歳晩の感想……………	一五
私と雜誌……………	一五
郷里にて……………	一六
思出すまゝ……………	一六
脚本について(A)……………	一五
この頃の事……………	一六
あの夜の感想……………	一七
大地は揺らぐ……………	一七

思ひ出	一四
夏の夜	一七
脚本について(B)	一八
雑感(A)	一八
雑感(B)	一九
自作の上演について	一九
歳晚の感(A)	一九
手紙(B)	一九
春の花の印象	一九
幽寂の境に觸れた時	一九
演劇雜記	一九
魯庵氏の「思ひ出す人々」	二〇
歳晚の感(B)	二〇
晶　　貞	二〇
「安土の春」に就いて	二〇
春について	二〇
虚　　名	二〇
散歩の途上	二〇
一日の旅	二〇

所感斷片	二〇
隠されたる美	二五
『光秀と紹巴』に就いて	二七
雑感(C)	二八
輕井澤にて(B)	三〇
食後の一睡	三三
輕井澤にて(C)	三三
輕井澤にて(D)	三三
輕井澤雜錄	三六
雑感(D)	三九
雑感二三(A)	四〇
精進湖畔にて	四二
雑感二三(B)	四三
故郷にて	四五
白鳥隨筆	四七
感想錄(A)	四五
雑感雜話	四五
雑感集	五八
この頃	六〇

最近の感想	三三	巴里へ	三五
寒山の詩	三六	伊太利旅情	三三
ある圓本	三九	伊太利見物	三三
奈翁の述懐	三七〇	二三の見聞	三六
海外にてのある日ある夜（第一、二信）	三七	「最後の晚餐」など	三八
桑港より	三七四	ロンドンにて	三〇
ハリウツド一瞥	三七五	英吉利にて	三三
海外にてのある日ある夜（第三信）	三七六	沙翁の故郷	三四
海外にてのある日ある夜（第四信）	三九	ベルリンより	三六
加州南端の小都會にて	三八	英國の田舎	三八
海外にてのある日ある夜（第五、六信）	三九	巴里より	三三
海外にてのある日ある夜（第七信）	三八七	ある感想	三四
大陸横斷の車中にて	三九	歸路	三七
ある歡樂境	三九	老眼鏡	三五〇
冬のヨセミテ	三九七	女連れの旅	三五三
寒いシカゴからナイヤガラ瀑布へ	三三三	最近の感想	三五六
ニューヨークより	三六	晝寢の後	三六一
海外にてのある日ある夜	三九	散文的に見て	三六四
ニューヨークにて	三〇	銀座界限	三七七

海岸から山上へ	三六九	身邊小景	四三三
感想二三	三七五	感想・錄(B)	四六六
感想	三七七	劇場風景	四九元
「銀座」散歩	三七九	墓	四九五
新劇雜感	三八三	「新劇」見物記	四三七
所感二三	三八六	登山趣味	四四一
私も講演をした	三八八	詩吟時代	四四三
高野山	三九〇	樺太より	四四六
大磯にて(D)	三九一	樺太にて	四四七
憂鬱なる田園と谷崎氏の「藝」に就いて	三九四	北遊記	四四八
ロビーの夜	三九七	新京一瞥	四五七
ヘルンの舊居	四〇四	北平にて	四五八
輕井澤にて(E)	四一〇	支那の映畫館	四六〇
旅人の心	四一六	映畫「地獄篇」	四六一
銷夏雜談	四二〇	北京印象記	四六三

解題

中島河太郎 四七一

隨筆

(一)

觀劇餘錄

去る日曜に木挽町の菅公會演劇を見て、面白く感じたにかゝはらず、尙甚だ物足らぬ氣がした。今度は特別として、舊俳優が出し物に窮してゐるのは言ふまでもない事である。蓋し團菊相合してより、徳川三百年の泰平が培養し來つた舊劇の粹といふ粹をば演じ盡くしたのが、彼等の一世一代たると共に舊劇の一世一代で、死花が咲いたのである。且つ團洲も、寄る年波に色彩のうすらいだのは否まれず今は只昔の情力でやつてゐるのである。梅幸のみは舊の如くはしやいではゐれど、既に六十に足をかけては將來の人でなく、他は碌々の徒、染桶等が先輩の摸倣のみを事とし、新天地を拓くといふ工風をしない限りは團菊百年の後を知るべしである。元本もとほん我が脚本其物には價値少く、俳優がたよりであるから、俳優

に名手がなくなれば如何に俗衆が趣味低しとて永く今日の地位を保つことの出来ぬは自然の勢、眼識ある新作家出て明治の國民性に投ずる作を出し、少し技能ある新優人ありて之を演ぜば、團菊ヌキの舊歌舞伎劇を壓倒する易々たる者であらふ。團洲すら一時は無藝の壯士俳優に破られかけたではないか。

今回の劇につき、素人目に思ひつきし所二つ三つを言へば、輝虎配膳は舊劇中では上品な譯の分つた者であるが、見た所東京座の中幕位であつた。琴でわびるといふのが山であらふが、こゝが甚だ六ヶ敷いのであるが、外そ目には間が抜けてゐた、榮三郎のお勝が厄介な琴を持ちまはつて、八百藏の輝虎が仕方なささうにつツ立つてゐる具合如何にも芝居をしてゐるといふ風であつた。も一つ間の抜けたのは布引瀧で小萬が再び息を引いてから芝翫を引込ませて替玉を出す爲か、數分間黒布でかくして、外の役者が何もしないで、ぼんやりしてゐたのだ。

伊勢の三郎は活歴丈あつて淡々水を呑む様であつた。文句も平凡、三郎が素性を語るあたりも事もなげに運び、何の情味もなく、濱荻との離別もアツけない。鉢の木などの方遙か詩趣が深い。しかし義盛が炬火を振かざし、義經に向ての思入れは見事であつた。舊劇の美が多く形の上にあるのは勿論である。市原野のだんまり、鞘當などは云ふ迄もなく、實盛

も人形風の振とミュージカルの音聲が面白いので其の意味はつまらない。伊勢三郎も其の人物に同感するのでなく、赤地の直垂を着た公達が、知らぬ山地に行きくれて、賤が伏家をたゞく繪様な所が取得だ。西洋では獨逸などの新劇は益々舞臺面が淋しく、主にも性格の細かい所まで寫す様になるとか。白耳義の劇曲家メテルリンクは小説が近時心理的となつたと同じく、劇詩もやがて心理的となり、人心の隱微を穿ち神秘なる人生の意味を伺はしむるのを主とするやうにならうと云つてゐる。されど小説とは違ひ、芝居は目で見る物なれば、色彩の美、形式の美も捨つべからざる者であらふ。殊に我國劇は、幸か不幸か例の人形から影響された結果、精神はおろそかになつた代り、形式美はいたく進歩したのであるから、無論それに乗すべきではないが、もう少し内容をふやしてもらひたい。人情の上に今少し明治の看客の同感が集まつて来るやうに仕組まなくては仕方がない。

實盛物語は人物の配合、場面の組立は素人目にもうまいと見たが、筋は陳々腐々の上、切られた手をついだ爲蘇生したといふ馬鹿げた一件が我等のイルージョンを破つた。鋸引を見て西洋婦人が面を蔽ふたのも道理だが、産室を見せたり、小供が其處をのぞくなどするのもよくはない。此幕は菊五郎一人の芝居で、松助の九郎介は泣き方が少し下卑て、しつこくて、何時も程の出来ではなかつた。

二人袴は性から出た喜劇ではなくて、一寸した過失から起つたものであるが見るたび毎に面白く感じる。日本美術の粹として世界に誇るに足る者は我が舞踏で、變化の中に統一を保つ一の形式美として、希臘の彫刻なその靜的であるに反し動的である所がおもしろい。

だんまりと鞘當とは只一幅の活畫圖たるのみで、ノンセンス劇中のノンセンスなること例の通り。

終りに臨むで思ふ。今日劇場の繁昌は云ふ迄もなく、能の盛になつたのも一つは國民に餘裕が出来て、藝術を樂まんとするやうになる傾向であらう。それにつけても國民が暗々の中に明治の新演劇、新藝術の隆興を仰望してゐる傾向は所々に見る。演藝に關する雑誌の近時陸續出づるのもみな意味のあることであらうがたゞ遺憾にも此等の雑誌は皆例の劇通連の道樂で、歌舞伎年代記的穿鑿の外、我が新演藝の參考となるべきものは甚だ乏しい。もう少し新思想を以て根本的にやつて貰ひたい。就中竹二、青々國などの諸氏迄が、如電素岳等の諸老人と、いちぢつこをしてゐるのは残念である。予輩が最も望を屬してゐる雑誌『歌舞伎』の如き、出来るものなら、半分は娛樂を主とし、考證を主とし通を主とする老通の舞臺とし、あと半分を以て劇壇に新波瀾を捲き起し新氣運を生ずるの活劇が演じて貰ひたい。

歌舞伎座評判記

(上)

▲古物展覽會で、今日の教育のある人達が見たらば、馬鹿らしくて一笑に付しさうな物ばかりだが、吾々は譯なく面白く感じた。昔の作は外形は散漫で不自然ではありながら、常に不朽の人情を寫してゐるから、外形が自然で、内容が不道理な新作よりも遙かに多く吾人を動かすのであらう。▲役者も日本一の歌舞伎座としては極めて無人で見すばらしいが、皆豫想外に熱心に忠實に演じてゐる、八百藏、梅幸、羽左衛門等が大役を引受け見物を動かす手腕は正に稱賛すべきもので、團菊を持出してどうかうといふのは殘酷な批評だ。▲今日の小説家や美術家で彼等俳優の如く諸種の人物を兎に角見られる丈に描き分ける者があらうか。羽左衛門梅幸が年齒やうやく三十を過ぎたばかりで、かゝる伎倆のあるのは敬服を價するのだ。▲都合八幕の中最も面白かつたのは「關の扉」と「累」。「累物語」で予に取つては、是が始めてであつて、作其物も役者の藝も非常に氣に入つた、昔の芝居は人間の心機一轉を

亡靈の祟にするのが癖だが、此等は今様に解釋して、一種の女性のタイプを痛切に現はしてゐる。身を賣らんと決心する程の貞操の女が鏡を見せつけられて、容貌の醜くなつたのに驚き、自殺を決し遂に嫉妬に平生のたしなみも失ふに至る迄の順序が如何にも尤らしく、梅幸も巧みに原作を躍動させて、吾人に同感の涙を漣がせた。▲吾人は半四郎の型も知らず、秀調のも見ぬゆゑ、此等名優に比べて、梅幸が何處の科白が下手で、どれ丈劣つてゐるか知らぬが、梅幸が忠實に心裡の變遷を見物の胸に映す丈に演じたのは以て多とするに足る。▲八百藏の與右衛門も一日中の出来で、累をなだめる工合から、如何にも困つたといふ態度まで、吾人の素人目にも非難すべき點はなかつた。土橋の場は昔の役者のはイヤラシ過ぎで、氣味が惡かつたらうと推察されるが、梅幸八百藏のはよく中庸を得て居ると思ふ。▲全体舊狂言を演ずる毎に、昔の役者を矢鱈に褒めて、骨董屋が古物をいぢくるやうに、ツマラない何^{どこ}でもよい所を有難がる老人連もあるが、此等老人は天保式の修養のみしてゐるのだから、昔の演り方が先入主となつて頭に染み込み、少しでも其に違つて新しい分子が入ると、目ざはりになるのだらう。しかし公平に比べて見たらば、梅幸必しも半四郎に劣らぬかも知れん。▲松助の金五郎は思ひの外拙かつた、もう少し手きびしく演らねば、與右衛門の殺害を決するが引立んと思ふ、蟹十郎の勘八はよかつた。▲八十

助の才次郎は拙い、羽左衛門の花形姫は上品で可憐で、異が非常に引立つて、亡霊が消え失せて、舞臺俄かに明るくなつて、三人の暗闘は眞に繪も及ばずであつた。

(下)

▲關の扉は美男子揃ひで奇麗だ。所作事は伎倆はあつても容貌の醜い役者では左程面白くない。羽左衛門の關兵衛は才に任せて、成田屋を眞似、折々は普羽屋の身振りもし、市村録太郎にもなり、關兵衛にもなる。畢竟未製品であるが、この大役を縦横自在に踊りこなす伎倆は他日の大成を豫想せしめる。大伴黒主になつてからは、天下を望むといふ人物に見える。なかつたのは、歳の爲だ仕方がない、小町も墨染も巧みであつたと思ふが、吾人は之を微細に批評する資格はない▲名人林中の常磐津は若干俳優の車輪の演技を凌いで、一日中で最も異彩を放つた。殊に上半を下手糞の文字太夫が語るから比較して一層此人のエライ事が分つた。蓋し常磐津は林中と共に滅亡するのであらうから、其の美音を聞く丈にても、此芝居は觀る價值があるのだ。▲瓦礫寺の闇闘は少し氣が抜けて、立廻りも變化が乏しく前後重複した點が多かつた。大切の鞆當も精のない疲れ果てたといふ態であつた。▲嘉平次住家では羽左衛門の木下藤吉と吉右衛門の市作が最も氣に入つた。藤吉を歴史上の太閤らしくないといふ人もあれど、役者

は脚本丈のことを演ずればよい。貴人が貧しい武骨な老武士の前に従順に其の命を聞くのが見せ場であつて、羽左衛門は嘉平次の強くなる程柔しくなつて、輕妙の態度は原作を一通りに顯はしてゐる。この作は舊劇の傑作でもあるまいが、胴丸の鎧の金を奪つて逃げたといふ史上の小事を種として、かゝる纏つた脚色を案出したのは今の作者の遠く及ばざる所だ▲市藏の嘉平次は柄にあるのだから、惡からう筈はないが、平生程巧みでもなかつた。この芝居で見ると、市藏も松助も餘程意氣消沈してゐる。相手が若輩だから、骨折甲斐がないと思ふのかも知れぬが、この人々は最早過去の役者で將來の劇壇にさしたる事をなし得る望もないやうだ。▲時藏の光秀は散髪頭の中へ一人チヨン髷の交つてゐるやうで、不調和甚だしい。濡髪は流石にうまかつたが、要するに「アナクロニズム」の藝風だ。▲八十助の櫻井小進吾、久吉の郎等雜兵共はいくら無人でも最少し役者らしい者を使ふから然らざれば全く出さない方がよい。▲小野道風二幕中では、八百藏の道風が姿を變へて頼風に昔を語る所が最も面白かつた。羽左衛門の頼風も神妙に勤めて、如何にもしほらしかつた。市藏の獨鈷の駄六は市藏としては左程妙でもなかつたが宗三郎の伴健宗、役者以上の出來だ。この人あつて道風館の上半は見えて居られたのだ▲小屋前では羽左衛門の與五郎と長吉時藏の濡髪共に上手ではあれど、物が無駄が多く馬鹿らしいから見